能登文化の広がり

二〇一六（平成二十八）年六月二十日（月）　西山郷史（さとし）

『能登のくに―半島の風土と歴史』　交流
『伝説とロマンの里』　伝説・歴史
「能登の民俗芸能」『石川県の民俗芸能』加賀・今村充夫・平成15年
「石川県独自テーマー九項目」『石川の祭り・行事』小倉学・今村充夫　平成11年　年中行事

能登はやさしや土までも　『三日月の日記』浅加久敬　元禄九（一六九六）年に能登巡り。尾山　馬子　杵歌
泉鏡花　『河伯令嬢』　大笹　「女ばかりか草さへ菜さへ…」『鏡花全集』巻廿三　昭和二年四月　○『ふるさと文学探訪』鏡花・秋声・屋星

長太ムジナ
文化五年（一八〇八）『加賀藩史料』「鳳至郡大沢村の長太、老狸を殺した事を届出づ」
大正十二年　『石川懸鳳至郡誌』刊行。昭和四年『山海評判記』和倉・白浜・虫ヶ峰　「長太はおるか　おるは何じゃ　三年前の夫の敵」「按摩の言ふには、花咲爺さん、桃太郎を知ったもので、此を知らないものはない筈だ、と言ふ。…尤も北國に限るであろう。」
浅草飴屋姿歌舞伎　大阪で芝居　長野県？狢の墓　○「済度される鬼神―続き因縁話の世界―」『説話論集　第十六集』清文堂出版・二〇〇七年刊

節談説教　能登節　港町の伝承、北海道布教

※能登川　能登川町は、滋賀県神崎郡にあった町。麻織物の産地として知られ、近代には紡績で栄えた。近江商人発祥の地の一つとしても知られる。二〇〇六年東近江市に編入合併し廃止。○「水と信仰」昭和五十四年「いしかわ」七月号　昭和四十六年十二月二十一日
相馬信行、早川正、六月十日

能登山　男鹿半島。椿という地名は暖地性の「ヤブツバキ」が自生するところから由来しています。椿地区の能登山にある椿の群落は、自生北限地帯として大正十一年に国の天然記念物に指定されました。
能登山には悲恋の物語が伝えられています。その物語とは―そのころ、加賀の国からは盛んに商いの船がやってきていました。
あるとき、能登の船乗りの若者が村一番の美人で働き者の娘と恋に落ちました。しかし若者は船乗りの身。村に長くは留まれませんでした。そこで若者は、二年後にきっとまた来る、そのときには必ず故郷の美しいツバキの実を持ってきて見せてあげよう、と約束して旅立ちました。娘は待ちました。若者に会う日を楽しみにしながら。しかし、約束の二年が経っても若者は来ませんでした。娘は、あれだけ固く誓ったのに若者が来ないのは、難波して死んでしまったからに違いないと思いつめるようになりました。待ち焦がれて3年目のある日、娘は悲しみのあまり海へ身を投げました…。若者が再び村にやってきたのは娘の旅立ちから間もなくのことでした。若者は悲しみに暮れました。若者は村の岩山に登り、二人の約束だったツバキの実をひとつひとつ蒔きました。ツバキの花が咲く岩山はいつしか、能登山と呼ばれるようになりました。「日本海における半島の民俗」『東北の民俗　海と川と人』考古民俗叢書24　昭和63年
元は能登尼崎（海士岬）の漁師が主人公　円応寺　男鹿市船越粟津姓

能登屋

珠洲焼　十二支群、四十数基窯跡。昭和三十六年

輪島塗

蓮能尼　実悟『拾塵記』「大永七年（一五二七）十二月廿五日夜能登国鳳生（ミカ）郡ニ鈍内（なたうち）之内多羅村…」
日野一流系図　文明十六年十六歳時、法花経六部奉書写能州大社六ケ所令奉納